

う。しかし、私は、母国語で論理的に自分の意見・考えを主張する訓練や、外国の社会・文化に肌で触れる機会を増やすことも劣らず重要なことではないかと、ドイツ滞在中にしばしば感じたものである。一方、「外国語を学ぶことでより深く自国語を知る」というのも、やはり真理だと思われる。外国語の学習は単なる外国追従ではなく、相互理解の土台になると考えるべきであろう。

以上の個人的・主観的な体験や意見が、外国人や外国語と接する際に何らかの参考となれば幸いである。



イタリア語はやさしい、と言われることがよくある。「一番やさしい外国語」——こんなフレーズをつけたイタリア語文法書の広告を新聞か何かで見かけたことがある。その時は、何とも言えずウンとうなってしまった。そのわけは、色々ある。それを語っていくと、イタリア語の特色を、さらにはイタリアという国の、あるいはイタリア人の特色までも語ることになるのではないかと思う。この文のタイトル、ヴィーヴァ ラ リングァ イタリアーナ!の綴りは、Viva la lingua italiana!である。すぐ分かるように、発音はほとんどローマ字読みの通りである。パスタ = pasta、ピッツァ = pizza、ヴィーノ = vino (ワイン)、ブッコ = burro (バター)、フォルマッジョ = formaggio (チーズ)、等々、ちょっと見聞きすると、これはやさしそうだぞと嬉しくなってくる。

そして文法を学び始める。やはり何となくやさしい感じがする。他の外国語に比べて確かにやさしいかもしれないぞ、とそんな気がしながら入門文法の半分ぐらいまでは進めるかもしれない。この間に出てくる簡単なフレーズを覚えていくと、なんだかもうイタリア語は自分のものになったような気さえするかもしれない。これはとても貴重なことだ。外国語に上達するには、その言葉に親しみやすさを覚えるのが一番だからだ。

このあたりでイタリアに観光旅行にでも出かけ、覚え立てのフレーズを口にしてみると、何とすべて通じてしまって、感激してしまうかもしれない。やさしくて気さくなイタリア人は、ことにお金持ちの日本人の財布に期待している店やホテルの人たちは、イタリア語がお上手ね、なんてほめてくれるかもしれない。これでもうイタリア語は大丈夫、なんてすっかり安心してしまってもいい。

でも、やはりそう簡単にはいかないのが、外国語というものだ。初級文法ですら、最後の三分の一ぐらいのところになると、あれこれ面倒なルールが少なくなくなり、覚えねばならぬ事が多くなってくる。しかし、それでも、他の外国語に比べれば、まだいい方かもしれない。しかも、このあたりまでに練習を積んでくる中で感じることで、イタリア語の作文は、とてもやさしそうだ。何と言っても語順についてのルールが厳しくない感じがする。どの語をどこにおいても、つまり、語順なんて気にせずに頭に浮かんでくる単語をそのままの順で並べていけばいいような感じさえするかもしれない。そしてイタリア語ってラクな言葉だなと、すっかり安心してしまってもいい。

でも、もうこのあたりまでにそう簡単ではないぞと気づく人が、少なくないだろう。簡単そうに見える時でも、そちこちで、え??と驚かせられたり、いやあ!と思わず声をあげたり、ウンとうならされたりせずにはおれないことに何度も出くわしてしまっているはずだからだ。

たとえば、すごく簡単そうに見えた初めの発音にしてからがそうである。日本語文字で表記すれ

ば「り」となる音がri, li, gli, と三つある。これを聞き分ける事は、実に難しい。発音し分けるとなると更に難しい。また、日本語で表記すれば「に」となる音は、鼻音の「に」=niと日本語の「に」そのままの音であるgniの二つがある。これを常に正確に聞き分け発音し分けるのも、決して容易ではない。

——20歳代の終わり近く、ローマ大学で研究していた時、休日に公園の芝生で寝ころんでいたら、3 - 4歳の男の子がそばに来て座り込んだ。私が、名前は何ていうの?と尋ねたら、彼は「ニーノ」と答えた。私が、「おお、ニーノか」と言ったら、彼は、「ノー、ニーノ」と言い返してきた。私が「分かった、ニーノだ」と言ったら、彼はまた「ノー、ニーノ」と言う。私が「分かった、ニーノか」と繰り返すと、彼は明らかにイライラした表情を見せながら、大きな声で、「ノー、ニーノ」と叫んだ。ここに至って私も気づいた。彼は自分はNino、つまり鼻音の「に」で始まる名前「ニーノ」なのに、何度そう言っても、相手の大人が分からずに自分をGnino、鼻音でない「に」で始まるニーノだとばかり言っているのだ。カリカリしてしまったのだ。私が細心の注意を込めて鼻音を発し、「ニーノだ」と言ったら、彼は、やっと分かったかと言わんばかりに、「フン」と言うと、さっさとどこかに行ってしまった。——イタリア語の発音を甘く見てはいけなぞ、やさしいイタリア人達から「イタリア語がお上手ですね」なんてお世辞を言われて無意識のうちに安心しては本当の上達は望めないぞと、この時、私はこの「ニーノ」君から厳しく教えてもらったのだ。

簡単そうに思える文法にしても同じ、いや、これ以上である。たとえば冠詞の用法である。一応のルールはある。それを記憶しておくことは決して難しくはない。しかし、そのルールにどうにもあてはまらない用法が、限りないと思われるほど多い。どうしてここでこんな冠詞を使うの? どうしてここでは冠詞がいらなの? と屈辱すなわち文法上のルールからはどうにも分からない用例に、頻繁に出くわす。イタリア人たちに聞くと、

とにかくここではこうなるな、と決まって答える。つまり、ルールにはなっていない、あるいは、ルールには反するかもしれないけど、とにかくこういう用法なんだよ、と言うわけだ。

同じことは、作文の時の語順になると、更に複雑に表れる。ちょっと見にはどうでもいいように思える語順に、やはり、ルール化されていないかのように思える様々な様式があって、その一つ一つが独自の微妙なニュアンスの違いを作り出しているのだ。これは、もう、外国人にはマスター不可能ではないかとさえ思えるほどだ。

この語順の複雑さは、イタリア文を書く時のみならず、読む時にも我々を迷わせる。筆者によって、文章の構造が実に多様に異なるから、慣れていない筆者の文章、ことに独特の文章を読む時は、初め少し慣れるまで、とても苦労することが少なくない。少しくらい慣れても、なぜか分からぬがとにかくこの人の文章はどうにも読みにくいと言う場合も少なくない。これはもう、多く読んで慣れていきながら何となく読めるようになっていく他はない。文法や文体のルールではどうにもならない、イタリア語・イタリア文の難しさないし深さである。「一番やさしい外国語」なんてとても言えないのだ。

こういうことは、イタリア人のための大きな、本格的な文法書を読んでもなお良く分かる。ある項目のルールの説明はほんの数行で終わっていて、それに続いて、しかし次のような用法もある、と例外を示す文章が延々と数ページにわたって続いているといったことが珍しくない。まさに、ルールはあって無きが如し、なのである。

しかし、決して無いのではない。無いかの如くでありながら、きちんとあるのだ。あるのだけれど、それに当てはまらない、ないしはそれに反するかのような例が実に豊富なのだ。

言葉から受けるこうした印象を、イタリアという国ないし社会、あるいはイタリア人たちから受けることが非常に多い。表向きにはルールはきちんとあるのだけれど、しかし、実際の日常生活の中ではまるで何のルールも無いかの印象を受ける、と言ったことは決して珍しくはない。

あるはずのルール通りにきちんとやってもらおうなんて思っていたら、イタリアではかえってイライラさせられるばかりで、非効率なこと甚だしい。ルール通りに何かをやってもらえたら、今日は何たる幸運！と喜ぶぐらいでない、イタリアでの生活はできない。

では何もかも無茶苦茶かという、決してそんなことはない。その場その場できちんと独自のルールはある。それがまるでルールでないかのように表向きには見えながらきちんと独自のルールとして存在している。そこが、ちょっと見にはどうにも分からない。いや、かなり慣れ親しんだつもりでいても、分からない。しかし、とにかく一定のルールはある。

このように、あるはずのルールが無いかのようであり、無いかのようであるルールがきちんとあるといった感じをイタリア語からも、イタリア人たちの生活からも共通に受けるのは、しかし、当然かもしれない。言葉はまさにそれを創り出し、使い続ける人たちを表現するものに他ならないはずだからだ。イタリア語の親しみやすさと難しさ、深さは、そのまま、イタリア人たちの親しみやすさと理解し難さ、深さであると、つくづく思う。

イタリアを、あるいはイタリア人を表面だけからあれこれ決めつけてしまっただけだと思ってしまう。彼らは確かに親しみやすくやさしい。しかし、やはりどこか外見からはつかめない深さを持っている。彼らの経済は日本のそれと比べると、表に表れる数値の上では劣っているかも知れない。彼らの収入は日本人のそれよりも少ないかもしれない。しかし、彼らがもつめる生活必需品、とくに食料は日本よりもはるかに安価である。だから生活費はずっと少なくて済む。それに、彼らは、我々日本人よりもはるかに多くの時間的余裕を持って暮らしている。何のためだか知らないけれどいつもアクセクと、誰も彼もが「頑張れ」、「頑張りましょう」と気張っている我々よりも、はるかに自分自身を大事にして、精神のゆとりをもって暮らしている。それは、彼らと親しくつきあってみて初めて分かってくることで、

表向きの統計の数値などからは分からない。

こうした精神のゆとりが、おそらくは彼らの親しみやすさ、やさしさになって表れているのだろう。たとえば、電車やバスの中での席の譲り合いなど、日本ではもうとても見られないほどである。また、どこの図書館も、大学のそれであれ公共のそれであれ、どんな外国人にでも、身分を証明するものを示ささえすれば、本を自由に利用させてくれる。法的に禁止されているものでなければ、コピーも自由にとらせてくれる。この自由のおかげで、私もずいぶん研究を助けられている。——（ここでも、法的なルールがあるのに無いかのようになることがある。係の人と親しくなったり、あるいは日本から短期的にわざわざ文献を探しに来たのだからと事情を説明して分かってもらえたりすると、あるはずのルールが無いかのようになって、貴重本のコピーが得られることも珍しくない。）——日本で、その大学にまったく無関係の者がその図書館をヒョイと訪ねて行って、身分証明書だけを示せばどんな本でも自由に利用させてもらえるなんて、きわめて難しいだろう。

二十代の終わりからこれまで、ローマ大学とフィレンツェ大学で、あわせて延べ三年余り過ごした。また、短期的に学会や文献探して何度かイタリアを訪れた。それなのに、いつも、やはりどことも言えず魅力的だな、いいなあ、と思うことが多い。どうにも理解しがたい複雑さや難しさを含めて、やはり、ヴィーヴァ イタリア（Vival, l'Italia! =イタリア万歳!）、ヴィーヴァ ラ リングァ イタリアーナ！（=イタリア語万歳!）なのである。

